青年期における友人からの相談に対する聞き手のストレスに関する研究
――共感性と対人ストレス過程の視点から――

山　辺　史　織

本研究では，加藤（2001）のモデルを参考にして，青年期において友人から相談を受けてストレスを感じた場合（相談ストレス群）の対人ストレス過程と，相談を受ける以外の場面で友人との間にストレスを感じた場合（対人ストレス群）の対人ストレス過程についての仮説モデルを設定し，各モデルの妥当性と変数間の影響関係の特徴について検討した。18～29歳を対象に，パーソナリティ（親しい人への共感性），認知的評価（対処効力感，脅威，重要性），対人ストレスコーピング（ポジティブ関係コーピング，ネガティブ関係コーピング，解決先送りコーピング），精神的健康（心理的ストレス反応，友人満足感）を測定し，160名の有効回答が得られた。各群の因子得点の差を比較するため，対応のないt検定を行なった。その結果，認知的評価の対処効力感と，対人ストレスコーピングのポジティブ関係コーピングにおいてのみ有意差が認められた。認知的評価の対処効力感においては，相談ストレス群より対人ストレス群の得点が有意に高くなった。また，対人ストレスコーピングのポジティブ関係コーピングについては，対人ストレス群よりも相談ストレス群の得点が有意に高くなった。次いで，多母集団同時分析を行い，各群における変数間の影響関係を検討するため，標準化推定値を求めた。等値制約を行なった結果，適合度が最も良好な値であった配置不変モデルを最終解として採用した。そのため，群間において同一の観測変数を扱い，同一の構成概念が仮定できるということが示され，本研究において設定したパス係数を対人ストレス群と相談ストレス群別に検討することが妥当であることが示唆された。仮説モデルの検討の結果，対人ストレス群においては，対処効力感は親しい人への共感性から正の影響を受け，解決先送りコーピングに正の影響を与えた。一方，相談ストレス群においては，親しい人への共感性から対処効力感，および対処効力感から対人ストレスコーピングに有意な影響が見られなかった。相談ストレス群においては，脅威は親しい人への共感性から有意な負の影響を受け，ネガティブ関係コーピングに有意な正の影響を与えた。一方，対人ストレス群においては，親しい人への共感性から脅威に有意な影響が見られなかったが，脅威からネガティブ関係コーピングへの有意な正の影響が見られた。したがって，友人から相談を受けてストレスを感じた場合と，それ以外の場面で友人との間にストレスを感じた場合とで，共感性から認知的評価，対人ストレスコーピングに影響を与える過程に違いが見られることが実証された。